

農語れる人材育成へ

【わかやま】食農教育に力を入れるJAわかやまは10月上旬、2024年度寄付講義「食と農のこれからを考える」を和歌山大学で開講した。日本の食と農、農村に関する情勢や課題などを講義。学生やJAの中堅職員が幅広い知識を得て自分なりの考えを持ち、農業に対する理解醸成や将来のJAを担う人材育成を目指す。翌1月28日まで15回開く。

JAわかやま 和歌山大で寄付講義

同講義は、今年で7年目。シラバスに組み込まれ、卒業単位となっている。本年度は学生363人と同JA職員10人、行政関係者3人、高校生6人、一般聴講生1人が受講。主任講師で同大学経済学部の岸上光克教授は「積み重ねた実績は模範となり、他JAにも取り組みが広がっている。この講義の存在意義は大きい」と評価する。各回のテーマは多岐に



寄付講義の様子

わたる。リレー講義形式で、各分野の専門家が講師となり現状や課題を捉

えて考察する。JA職員も登壇する。受講生の同大学観光学部観光学科1年、西胡々菜さん(19)は「農業の学を深め、アグリツーリズムなどに生かしたい」と話した。1回目は「現代の食料・農業」と題し、岸上教授が講義した。改正食料・農業・農村基本法で農業の持続的な発展、農地の維持に向けて、担い手以外の多様な農業者の役割が明確化されたことを紹介。消費者は食の関心が高まっている一方で、農の関心は低いままと指

摘し「和食でも国産を使用しているとは限らない。産地への意識は先進国でも日本は低い。考えてください」と訴えた。同JA東部支店の安井幸子さん(40)は「これからの農業を支えていくには、社会人、学生など包括的に意識を高める必要性がある」と示した。同JA営農生活部の田邊純三部長は「現場の実情や実態を横断的に学び、未来の道筋を拓くことができる人材が輩出されることを期待している」と話す。